

マイとミイのあかり屋さん

山守 美佳

ふたごの姉妹マイとミイのおうちは、あかり屋さんです。お店のなかには、たくさんのランタンがならんでいます。それらをひとつひとつ、ピカピカにみがくのが、ふたりの日課です。

「ぜんぶ、みがけたわ」

「きれいになったね」

ランタンをみがきおわったとき、カラランカラン、ドアのひらく音がしました。

「いらっしやいませ！」

ふたりは、とびっきりのスマイルで、お客さまをおかえます。

「ランタンくださいな」

さいしよのお客さまは、リスさんです。

「こちらはいかがでしょう。ホタルさんからわけてもらったあかりです」

マイはリスさんにあう、小さなランタンをえらびました。

「わあ、すてき。くらい森のなかでも、ドングリを見つけられるね」

リスさんは気に入ってくれたようです。おれいをいって、帰っていききました。

カラランカラン、また音がしました。

「カアカア、ランタンくださいな」

つぎのお客さまは、カラスさんです。

「見てよ、このはね。夜になると、すがたが見えなくなっちゃうの」

それは、たいへんです。

「こちらはいかがでしょう。にじをスプーンですくってあつめた、七色のあかりです」

ミイは、中くらいの大きさのランタンをえらびました。

「カアカア、それはいい。りっぱに見えるんだな、カア」

カラスさんはくちばしでランタンをうけるとすぐ、とんでいってしまいました。

「よろこんでくれたみたい」

ふたりは「フフツ」とわらいます。またまた、カラランカランとなりました。

ところが、ドアにはだれもおりません。け

れども、店の外からは「ランタンくださいな」という声がかきこえてきます。

ふたりが外にいてみると、ニコニコお客さまが空にいました。

「お客さまが……」

「お客さま？」

ふたりは、びっくりです。

「わたしのかわりに、おひさまになってくれるランタンありますか？」

おひさまが話しかけてきました。

ふたりは急いでお店にもどって、「よいしよ、よいしよ」とランタンを運びます。

「こちらはいかがでしょう」

「まあ、まぶしい！こんなに大きくてあかるいあかりならば、わたしがおねぼうしたとしても、こまりませんね」

おひさまは大よろこびです。

「おひさまもお休みしたいのね」
「お休みのおてつだいができてよかったね」

ふたりもっこり、ほほえみました。